

戦時中の体験を聞く会

平成25年11月17日(日)

11月17日(日)、当館講堂に82名の参加者をお迎えして開催しました。今年は「終戦の記憶」というテーマで、お二人の語り手に当時の様子やご苦労についてお話しいただきました。

語り手 あらかわ せいいち 荒川 清一 さん (熊谷市) 「航空通信隊～北海道・樺太駐屯～」



昭和2(1927)年熊谷市に生まれる。昭和19(1944)年4月 熊谷市立商業学校(現県立熊谷商業高等学校)在学中、陸軍特別幹部候補生に志願し航空通信隊に入隊。昭和20(1945)年3月初旬 南樺太 敷香(シスカ)に赴任。稚内から大泊(現 コルサコフ)まで、吹雪の中流氷の海を渡る。甲板の歩哨は10分交代。寒いというより痛かった。緯度が高く午後10時頃まで明るい。眠れない夜、米軍の日本語放送を受信する。大本營の発表よりも早くサイパン、硫黄島、沖縄の玉砕を知った。7月北海道帯広に転任。国後島へ転任予定だったが、船がなく行けなかった。終戦後、樺太に残った戦友の多くはシベリアに抑留され命を落とす。復員後、熊谷空襲の惨状と祖父、第二人の死を知る。

語り手 かねこ とみこ 金子 富子 さん (所沢市) 「戦火のフィリピン～ミンダナオ島～」



昭和11(1936)年ミンダナオ島 ダバオ市で生まれる。日系移民10人兄弟姉妹の下から3番目。昭和16(1941)年12月 日本軍によるフィリピン侵攻。戦時色が強くなる。昭和18(1943)年頃より戦火から逃れるため、母親に連れられジャングルを彷徨。倒木を利用して谷を越え、激しく流れる大河を渡った。野宿をし、機銃掃射を受け、略奪にもあった。テントの中で集団自決していた兵士たち。立つことすらできず座り込んで「おかあさん」と啜り泣く兵士。昭和20(1945)年8月。伝單で終戦を知る。敗戦については何も感じなかった。もう死ぬことはないと思った。米軍に保護され収容所へ。11月、日本へ帰還。初めて目にした富士山の美しさは忘れません。